＜論壇＞

虐待防止のための判定マニュアル作成の弊害

柳澤秀明

埼玉県熊谷保健所

The Problem of Assessment Manual to Prevent Abuse

Hideki YANAGISAWA

Kumagaya Public Health Center, Saitama Prefecture

最近，日本でも文明社会の歪みの一端として児童虐待が増加している．その原因には分析科学に代表される完全再現性（コピー）を植え込まれた親の完璧主義が上げられている．つまり，分析という過去現象に固定化した反動として虐待を行うという考え方だ．子供は教科書通りには育たない．それに対して，特に乳幼児に対する虐待は発見が難しいことから，行政は育児支援の名目で乳幼児を対象とした家庭への訪問を開始しようとしている．訪問時に何を見るのか？多くの自治体が乳幼児虐待リスクアセスメント指標の作成に苦慮しているようなので，問題点を整理してみる．

リスクアセスメント指標の作成側による提示では項目がかなり多くなってしまう．一方，使用側からすると多項目のチェックは困難であり，指標策定側と指標使用側の意見はかなり異なっている．その原因は訪問に対する意味付けの相違である．児童虐待は察知と予防の両面が必要である．現代分析科学的な思考ではどうしても察知という過去事象への観測重視になってしまう．それに対して，予防は治療でもあり，未来事象なので過去事象の把握だけでは不十分である．否，過去事象を重視し過ぎると未来事象を軽視する可能性が高くなるのだ．だからこそ文明社会では子供という未来を否定し，自分という過去中心で虐待を行ってしまうわけだ．児童虐待防止で説明するなら，虐待の可能性察知後の対応によって過去重視か未来重視かが決まることになる．虐待察知後は他機関に対応を任せるなら観測という過去重視になるし，察知後の治療や予防を考えるなら未来重視になる．過去重視では1回の観測で虐待を察知する必要が有るために多項目のチェックが必須になる．それに対して未来重視では，反復訪問自体が虐待の予防と治療になるので，1回の観測が占める重要性は少ない．リスクアセスメント指標を使用する現場の保健師達は，これまでの経験から訪問継続の必要性を把握している．そのために，多項目に及ぶチェックを強要されることが訪問時の人間関係作成の妨げになることを直感しているのだろう．家庭訪問の継続に意味を感じる現場の抵抗である．

この過去事象重視と未来事象重視の相違を認識しておかないと，リスクアセスメント指標の作成によっては逆効果が生まれることにもなりかねない．訪問の回数を減らせば観測という過去思考にならざるを得ないのでマニュアル的な人間関係に発展する可能性が高くなるし，訪問回数を増やせば予防という未来思考の人間関係に発展する可能性が高くなる．後は人件費に対する考え方で決まるだろう．絶対的過去思考に染まった現代人はマニュアルを要求する．それは若い保健師も同様である．しかし，詳細な指標を絶対視してしまうことは，新たな発見の力を削ぐことにもつながる．詳細な指標の策定は訪問者を分析的・過去的に押しやる可能性も有り，察知はできても予防に直結するとは限らない．Weber-Fechner の法則を解析すると「人間関係から読みとる感が回数と時間に比例する」ことが分かる．分析の絶対視という過去思考の現代社会から生まれた児童虐待問題に，観測分析という過去思考だけで対処することにならにように注意すべきである．

360-0031　埼玉県熊谷市末広 3-9-1

3-9-1, Suehiro, Kumagaya, Saitama 360-0031, Japan